

# ひとはくの 国際交流

## マレーシア、サバ州における 人と自然の博物館のとりくみ

私はボルネオ島にあるマレーシア国立サバ大学に1年間赴任しました。現地では生物学者を育てたり、博物館の設立を指導したり、熱帯雨林保全のための調査や環境教育に取り組んできました。その後、ひとはく(兵庫県立人と自然の博物館)は、毎年、違う分野の研究員をサバ大学へ派遣しています。自然史博物館が外国の機関と共同して研究や自然保全活動を行っている例は世界的に見てもまれで、ひとはくの活動は日本の博物館の地位向上に大きく貢献するものです。さらに、地球環境問題について国際的な支援を行っている地方自治体は少なく、兵庫県の先進的な環境保全への取り組みを国内外に強くアピールする活動となっています。

このひとはくの活動は、1997年にサバ大学から学术交流の申し入れがあり、両機関が協力してボルネオ島で調査研究を行っていくことなどを約束した協定書を締結したことに始まります。ボルネオ島には世界中で最も多様な生物が共生している熱帯雨林があります。この協定に基づき、ひとはくはこれまでに12回の生物相調査を同島熱帯雨林で実施し、貴重な動植物の標本収集や、多様な生き物が共生する生態系の仕組みを調査してきました。人と自然の共存を

図るためには、自然界の共生系の知恵を学ぶ必要があります。ひとはくはサバ大学との提携によって、共生の宝庫であるボルネオ島熱帯雨林に調査拠点をもつことができ、多くの研究成果を得ることになったのです。また、ボルネオ島では熱帯雨林が伐採やアブラヤシ農園によって急速に失われようとしています。このため、同島の熱帯雨林を早急に保全することが温暖化防止などの地球環境問題の重要な解決課題となっています。ひとはくの研究活動は熱帯雨林保全にも貢献することになりました。

しかし、研究活動だけでは人と自然の共生を実現することはできません。自然を守っていくためには、その地域や周辺に住む人々が自然環境の価値を認識し、それをどのように保全しながら利用していくのかを考えることが必要です。残念なことに、ボルネオ島では生物学者や標本・資料を保管できる博物館施設などが不十分で、独力で調査研究を行い、その成果に基づいて地域の人々を啓蒙していく活動がうまく展開されていないのが現状です。サバ大学がひとはくに学术交流を申し入れ、共同で調査を行う理由の一つがここにあります。そこで、ひとはくは2002年から、国際協力事業団(JICA)「ボルネオ生物多様性・生態系保全プログラム協力」とも協力して、サバ大学に研究員を派遣し、生物学者の育成や博物館設立の指導を開始したのです。この活動によって、すでに、サバ大学ではひとはくを手本にした標本収蔵庫建設や標本管理データベースが完成しました。今は、4人の博士号研究者の育成や、研究方法や環境教育の教科書出版、現地での共同研究などが進み、その成果を実際に環境保全に活用するための指導が行われています。

さらに、ひとはくは熱帯雨林保全のために、日本人への環境教育活動も行っています。実は、ボルネオの木材やアブラヤシの一番の輸入先は日本なのです。毎年7月には、兵庫県の小中高生26名がボルネオ島の熱帯雨林を実体験する自然学校「ボルネオ体験ジャングルスクール」を実施しています。また、淡路島で開催された国際博覧会「ジャパンフローラ2000」では共生関係をテーマに、ボルネオから採集してきたラフレシアなどを活用した熱帯林展示を作成、500万人を超える観覧者がありました。花博終了後には、ひとはくに展示の一部を移築し、本館1階に新常設展示「共生の森ボルネオ島の熱帯雨林」をオープンしました。こうした環境啓蒙活動の成果はひとはくの外へも波及しています。今年、NPO法人人と自然の会がエコツーリズム研究会を立ち上げ、ボルネオ島熱帯雨林で大人版ジャングルスクールを始めました。

これまでに蓄積した研究活動の成果を役立て、ひとはくは日本とボルネオの両方から人と自然の共生社会の実現に取り組んでいます。こんなユニークな活動を続ける博物館が兵庫県にあることを知っていただき、自慢に思っただけならうれしいです。

(自然環境・評価研究部 橋本佳明)



調印式



ラフレシアの採集



調査活動風景



サバ大学での指導



ジャングルスクール